

清流

題字：芳野 充

令和5年1月30日

第73号

発行所 加来不動産(株)

発行者 加来 寛

北九州市小倉南区守恒本町1-12-23

穏やかに

静かに

清流のように

誕生日は両親に感謝する日

有難いことに今月の三十日、無事に誕生日をお祝い、また一つ年を重ねることが出来ます。二十代中ごろまでは、自分の誕生日はわたしの主役でまわりの人にお祝いしてもらった日だ、という認識でいました。しかし、素心学塾塾長の池田繁美先生より「自分の誕生日は両親に感謝する日です」ということを教わったとき、まさに目からウロコが落ちたような感覚を味わいました。いまでは、自分の誕生日には必ず両親の墓参りに出かけています。

父は脳梗塞でわたしが高校三年生のときに、母は心不全でわたしが二十五歳のときに亡くなりました。わたしは四人兄弟の次男で、下には妹と弟がいます。父が亡くなったときには、妹は中学生で弟は小学生でした。

父が亡くなった当時、誤解を恐れずに本音を言えば、ホッとしたりわたしがいましました。というのも若く複雑な家庭事情があった我が家は、恥ずかしい話ですが父は夕方早くから酒を飲み、酔うと母や兄によく暴力をふるっていたからです。

また世間では高度成長期と言われる華やかな時期に、父が事業に失敗したため、ろくに食事もとれないことも珍しくなく、お米や野菜を家主さんや教会の牧師先生にいただき上がっていたみじめな時期もありました。

父は生命保険にも加入していませんでしたので、食べ盛りで学生という一番お金がかかる時期の我が家はいつも火の車。母がお金のことと頭を抱える姿が目に見え、焼きついています。しかし、そんななかにあっても母は前向きで、常に感謝の心を持ち、わたしたちに愛情を注ぎつけてくれました。

「誕生日は両親に感謝する日」。この言葉を聴き、当初は「母には感謝できても、父にはできない」と思っていました。しかし、結婚し子どもをもち、家業を継ぎ経営者となる過程で、親の苦労が分かるようになってきました。また十人兄弟の末っ子だった父に対して、「きっと親の愛情に飢えていて寂しかったのだらう」と思えるようになりました。

いまでは生前、父が口ぐせのように言っていた「お前たちが大きくなったら、一緒に酒を飲みたい」という想いを叶えるべく、父の誕生日とわたしの誕生日にはワンカップと花束を墓前にそえ、命日には兄弟四人であつまり、両親の遺影をまえに親子水入らずでお酒をくみかわす時間を大切にしていきます。

池田繁美先生は次のようにおっしゃいます。「『いま、ここにいる』という源は、両親です。そこに感謝の念をもてない人は、決してしあわせにはなれないでしょう」。

どんな親であろうと自分の原点は両親です。今年の一月三十日にも、墓前にワンカップと花束をそえます。心のなかで「お父さん、お母さん、生み育ててくれてありがとうございます」と、つぶやきながら。

加来 寛

